

2012年8月19日マタイ 4:23-25「教え、宣べ伝え、いやす」

キャンプの続いた過酷な夏でしたが、皆さんの祈りに支えられて祝福の中で過ごすことができた。サマーデイズでも豊かな神様の業を見させていただいた。皆さんのお祈りを覚えながら、私も皆さんのために祈っておりました。特に病を与えられている方々とそのご家族のために、癒しと平安を祈っておりました。

今日の記事はイエス様の癒しのお働きを伝えてくれるものです。もちろんイエス様のお働きは癒しの業だけではない。諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民衆のありとあらゆる病気やわずらいをいやされた。会堂というのは、ユダヤ人の生活にとってもっとも重要な場所です。そこでなされるのは主に礼拝、裁判、教育であると言われます。礼拝は、お祈りと聖書（律法と預言者）の朗読、そして説教の三部からなり、説教は、会堂管理者がコーディネートする。だから、会堂管理者のおめがねにかなえば誰でもすることができた。そういう会堂を巡っては、イエス様は聖書の正しい読み方を解き明かしてくださった。そしてそこで御国の福音を宣べ伝えられた。すなわち「悔い改めよ、天の国は近づいた」との宣教です。天の国は近づいた、神様の手によるこの世界のつくりなおしが、今はじまろうとしている。ゆがみや汚れに満ちた墮落した世界。神に反逆し、苦悩を深める私たち。そういう人間に神が救いの手をさしのべて、新しく作り直して秩序を取り戻してくださる時が、今、はじまろうとしている。だから、今こそ悔い改めて、罪から神へと立ち返れとのメッセージ。

そのようにしてイエス様は、「教え、宣べ伝え、そして病をいやされた」わけですが、この「教え、宣べ伝え、いやす」というのはイエス様のガリラヤでのお働きの要約でもある。ここで少し、これから読んでいくマタイ福音書の9章までの構造を説明しておきます。

この後、5-7章にかけて山上の説教。これは「教え、宣べ伝える」と対応

8-9章にかけて様々な病気の癒しが出てくるが、「癒す」に対応

そして、その締めくくりの9:35に、今日の要約と同じ言葉が記されている。

そういう具合に、これから9章にかけて記される、ガリラヤ地方におけるイエス様のお働きの「教え、宣べ伝え、いやす」という一文でまとめることができる。

その中でも、特に今日注目したいのは「いやす」というお働きであります。読んでいただければ誰でもお分かりになると思いますが、「教え、宣べ伝え、いやす」という三つのお働きの中でも、今日の記事の中で一番情報が多いのはいやしの業であります。24節に詳しく展開。こういった人々の中には、今で言えば、心の病、精神疾患と判断されるような方々も含まれていたことと思います。そういったありとあらゆる病の苦悩にいやしの手をさしのべられた。それはイエス様がそこに力を入れられたというよりは、その「いやし」を必要とした人間の側のニードのゆえであると言っていいでしょう。イエス様の評判を聞きつけて、おびたしい病人たちがたずねてきた結果として、そうなったのです。違う言い方をしますと、イエス様のもとにたずねてきた、あるいは人々がイエスのもとに連れてきたのは病人ばかりであったと言えます。

これは、今日の記事から分かる、ひとつの大切なことです。最初にイエス様のもとに集まった者たちは、病に苦しむ者たちであったということを心にとめておきましょう。イエスの評判は、偉大な教師としてでも、メッセンジャーとしてでもなく、まず最初は、愛と慰めに満ちた癒しの人としてであったのです。

このことは、私たちの教会の伝道の現実を考えるに際しても、大変重要な示唆を与えてくれるように思う。ここ数年、実践神学や伝道論の学びの中でしばしば聞くことなのですが、教会にたずねてくる人の質が、昔とは大きく異なっていると言われます。かつては真理を求め、高い精神性を求めて教会に来て、まさしく求道するという熱い魂の方々が集った。しかし今や教会はサナトリウムであることが求められている。病に、特に心の病に苦しむ方、人間を使い捨てにする消費社会についていけずに、傷ついて、もがいている人。そのような方々の癒しの場として、今教会はあらざるをえない。そのように論じられる時には、昔を知っている方々からはある種のさみしさと言いますか、ため息のようなものが漏れてくることもしばしばです。それは仕方ないことですね。かつてのご自分たちはイエスの教えと福音を求めて、熱心に求道し、自分の十字架を負ってイエスについていこうと献身の生涯を歩んでこられた。しかし、今は、そのようにして新しい道に歩み出すことができないで、教会に居場所を見出すことで、かろうじて息をすることができているような方が多いのかもしれない。そう考えますと、教会の未来はどうなるのだろうかという不安がよぎってもくるでしょう。そういう問題意識は大切にしなければいけないと思っております。ただ、今日の記事から教えられることは、病に苦しむ方が集ってくるというのは、何も最近の教会だけの傾向ではない、はじめからそうだったということです。イエス・キリストのもとには、昔も今も、病に苦しむ人、疲れた人、重荷を抱えている人が集うものなのです。もし、そのような苦悩と無縁のところ、教えと福音が語られてきたのだとしたら、むしろその教会のありようにこそ問題があったのかもしれないかもしれません。それは本当に正しい教えであり福音であったのかと問わねばならないのかもしれないかもしれません。

最初にイエス様のもとに集まった者たちは、病に苦しむ者たちであったのでした。イエス様は、なによりもまず愛と慰めに満ちた癒しの人として、彼らに触れてくださったのです。もちろんこのようにして集まってくる人々のすべてが、イエス様のことを約束のメシアとして正しく理解したわけではないと思います。また病の癒しというものが、正しい回心に結びつくとも限りません。その意味で、この愛の癒しの業を行うというのは諸刃の剣です。癒された人々をかえって間違った方向に導く危険を常にともなう。私も経験があります。私は、奇跡的ないやしの賜物は与えられていませんが、これまでに何人かの心病んだ方々と付き合いながら、その方々のために時間をささげて祈ってきました。それもまたわたしに委ねられたいやしの働きだと信じております。そういう働きの中で、彼らの心をイエスへと向けることができない、やればやるほどにただ私への依存度が増えていくというジレンマを常に抱えております。イエス様のもとに集った病人たちも、同じような弱さと誤りを抱えていたことだろうと想像されます。でもイエス様は出し惜しみされないので。愛を出し惜しみされません。いやしの業を出し惜

しみされません。たとえこの群衆が、やがて自分を裏切って十字架につけると叫びだすとしても、彼らに注ぐ憐れみを出し惜しみされることはないのです。

そして、実はこの癒しの業にこそ、メシアの本領があるということを覚えたいと思います。旧約聖書は来るべきメシアについて、病や障害に苦しむ人々をいやす人であると約束しています。イザヤ 35:5-6 (旧 p1116)「そのとき、見えない人の目が開き、聞こえない人の耳が開く。そのとき歩けなかった人が鹿のように躍り上がる。口のきけなかった人が喜び歌う。」メシア到来の時に、いやされた人々の歓喜の音が響く。このようないやしの業にこそ、神の愛と憐れみが具体化されるのです。そういう意味で、いやしの業は、救い主にとっての副業ではなく本業です。なにより、旧約の言葉づかいにおいては、「いやす」という言葉は、「救う」という言葉と深く重なっているということを知っておくのは大切です。今日は聖句表にいくつも載せておいた。これらを読んでいただくとよく分かるのは、罪人が救われるというのは、損なわれた神との関係を回復されて、魂だけでなく、心も体も、存在のすべてにおいて、まったく満たされたものとして完全にいやされるということでもあるということです。そしてまたこれらの聖句から気づかされることは、肉体的いやし・病的いやしと罪の赦しということは深い関係があるということです。

一か所開いてみましょう。詩編 103:2-3p939「主はお前の罪をことごとく赦し、病をすべて癒し・・・」同じく詩編 41:4-5p874。ここでは病の癒しを願う祈りと、罪の赦しを願う祈りがひとつのものとして神にささげられている。このように、旧約聖書においては、病的いやしと罪の赦しということが深くつながっている。これが暗示しているのは、病というもの、私たちの罪の問題と切り離して考えることはできないということ。違う言い方をすれば、身体的病にしても心の病にしても、いずれにしても「私たちが病を得る」という時に、私たちが抱えている罪の問題が、ある面において浮き彫りにされてくるということです。私たちが罪人であるのだということが、まざまざと浮き彫りにされてくる。それはどういうことかという、絶対的な不安感、よるべなさに気付くということです。

罪人とは、神との健やかな関係を損なっている存在です。神への反逆ゆえに、神の愛のもとにではなく神の怒りのもとに置かれて、永遠の滅びへと定められて道を見失い続けている迷子。それゆえの孤独、不安と恐れ、そういうものが私たち罪人の心の根っここのところには、誰でも必ずあるはずなのです。でも、元気で健やかな時には、そのような不安や恐れを認めることは難しいものです。そして神との関係の破綻とか、神と仲直りさせていただくなどということは考えようもしない、神なしでも生きていけると思うから。自分に自信があるから。でも病気を得た時に、私たちは罪人としての自分の欠けに気付くのです。弱さに気づくのです。気づかざるを得ない。面白いもので、ヘブライ語で「病気になる」を意味するハラーという動詞がありますが、この語を辞書でひきますと、その第一義は「弱くなる」であるのです。病気になるとは、弱くなることです。いやむしろ、これまで隠そうとしてきた弱さが、明るみに出される時。病の時というのは、罪人としての自分の絶対的弱さ、よるべなさに気付くときであるの

です。

一つ思い出すエピソードがあります。ある教会で、会員の方のご主人がガンで入院されたということで牧師はお見舞いにいった。すると、その方は笑い飛ばされて、私にはそんな宗教や慰めは必要ありませんよ、わざわざすみませんね、もう来ていただかなくてもいいですよ。スポーツマンで、会社の重役まで上り詰めたような方だったそうで、自分に自信をもっておられたのでしょう。しかし、その方に与えられた病はもう治るものではなく、日に日に弱っていかれたそうです。そしてそれからしばらくして、もう一度牧師がたずねますと、前回とは打って変わって、打ちひしがれた様子で、「先生、どうしようもなくさみしい」と言われたそうです。「どうしようもなくさみしい・・・」私たちは誰も、神から離れているかぎり、そんな寂しい迷子です。もし神が助けて下さらないのだとしたら、自分で自分を立たせることなどできない。自分で自分を慰めることなどできない。そんなさみしさと、よるべなさを抱えて生きているのです。私たちは本当に鈍くてかたくなですから、元気な時はそんなこと決して認めたくないのですが、病の時に気づかされるのです。

そう考えますと、病が与えられる時というのは、チャンスの時です。肉体の病、心の病において、私たちははじめて心砕かれて、自分の罪を認めて神の前にぬかずくということができるのかもしれない。神の前で、弱く惨めなはだかの自分をさらけ出して、神と本当に向き合うということができる時かもしれません。サマーデイズで、ある姉妹が高校生に証しをしてくれました。彼女は私たち夫婦と同世代の友人ですが、出産のあとにこころを病んでしまって、いわゆる産後うつを経験しました。その時に、自分で自分を助けることなどもう決してできないと知らされたのだというお話をしてくださった。神様に委ねるしかない。もう神様に助けをもうしかない。そう気づかされた時から、彼女の中でいやしの業が始まったということでした。そして、主はこの経験によって、彼女とご自身の絆を、それまでよりも一層強めてくださって、彼女をしなやかに成長させてくださったということ、私は友人として証しすることができます。主はそのようにして、病さえも用いて、私たちを、ご自身のもとに取り戻し、完全ないやしへと導こうとしてくださるのです。すなわち、神との健やかな関係の回復という、最終的な、私たちのたどりつくべき完全ないやしへと、導こうとしてくださいます。

考えてみますと、今日の記事に出てくる群衆も、病がなければイエスのもとに集まろうとはしなかったかもしれません。彼ら彼女らもまた、与えられた病ゆえに、無力で貧しい者として、イエスを頼り、その憐みにすがりつきました。主はわたしたちが、自分のよるべなさに気付いて、砕かれる時を待っておられます。私たちが砕かれて、主にすべてを明け渡すときに、主はわたしたちをご自身のもので愛してくださり、絆を固めてくださいます。その時もう私たちは、一人ではありません。主が味方でいてくださいます。そして主が味方でいてくださる限り、何も恐れはありません。どんな病も、恐れることはありません。

に、イザヤ 57 : 15-19 (旧 p1156) を一緒に読みましょう。

【新共同訳】

高く、あがめられて、永遠にいまし
その名を聖と唱えられる方がこう言われる。
わたしは、高く、聖なる所に住み
打ち砕かれて、へりくだる霊の人と共にあり
へりくだる霊の人に命を得させ
打ち砕かれた心の人に命を得させる。

わたしは、とこしえに責めるものではない。永遠に怒りを燃やすものでもない。
霊がわたしの前で弱り果てることがないように
わたしの造った命ある者が。

貪欲な彼の罪をわたしは怒り
彼を打ち、怒って姿を隠した。彼は背き続け、心のままに歩んだ。

わたしは彼の道を見た。
わたしは彼をいやし、休ませ
慰めをもって彼を回復させよう。
民のうちの嘆く人々のために

わたしは唇の実りを創造し、与えよう。
平和、平和、遠くにいる者にも近くにいる者にも。
わたしは彼をいやす、と主は言われる。